

平成25年に特に注意を要する病害虫

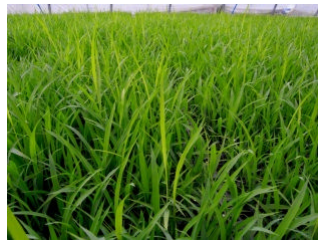
水稲の種子伝染性病害（苗立枯細菌病、褐条病、ばか苗病、いもち病）



苗立枯細菌病



褐条病



ばか苗病



いもち病

平成22年にはいもち病が極早期から初発し、平成23年には褐条病の発生が散見され、平成24年はばか苗病の発生が各地でみられ被害も発生しました。この原因として、自家採種した種子の使用と種子消毒が適切に行われていないこと、が考えられます。

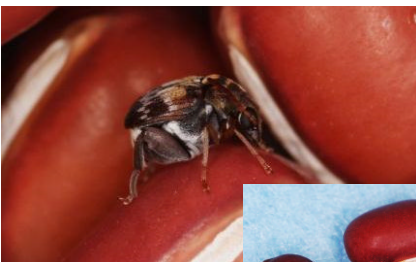
○種子は採種圃産の種子を使用し、種子消毒を適正に行うことが重要です。

○化学農薬に頼らない種子消毒として、温湯、食酢および生物農薬による消毒法が普及していますが、これらを用いて十分な効果を得るにはいくつか注意が必要です。

①単独で処理しないで、**処理法を組み合わせる**。

②**使用方法を守る**（生物農薬の浸漬処理時の薬液温度、温湯消毒機の能力以上の種籾を投入しない、温湯消毒後は濡れたまま保管をしないなど）

小豆のアズキゾウムシ



アズキゾウムシ成虫



アズキゾウムシによる被害粒

平成24年は8月下旬から9月にかけて、気温がこれまでになく高くなりました。このため、道南地方を中心に小豆にアズキゾウムシによる被害が認められました。

本種は、成熟した莢に産卵された卵がふ化し、子実内に幼虫が侵入して生育した後、成虫が羽化するとき子実に脱出痕を残します。羽化した雌成虫は再び子実に産卵をするため時間の経過と共に被害が拡大します。現在の処、圃場での防除方法はないため、以下の対策をこころがけてください。

○収穫後の子実はすみやかに出荷し、**必要以上に保管しない**。

○保管する場合は、**低温条件下におく**。

○被害がみられた子実や成虫は土の中に深く埋めるなど**適切に処分する**。

○は種後に余った種子は速やかに処分する。種子を保管した場所の清掃を徹底し、**種子を残さない**。

野菜類および花き類のオオタバコガ



オオタバコガ成虫



さやえんどうに食入する幼虫

ここ数年、道南および道央地方を中心に野菜類、花き類でオオタバコガによる被害が発生しています。

本種は飛来性の害虫で、いくつかの殺虫剤に抵抗性をもつこと、幼虫が作物に入り込むことから薬剤がかかりにくいいため、防除が難しい害虫です。以下の対策をこころがけてください。

○本種の飛来が確認された場合、**すみやかに本種に効果のある薬剤による防除を行ってください**。

○次年度も農業改良普及センターにご協力いただいてフェロモントラップ調査を実施します。フェロモントラップに本種が誘殺された場合、全道に向けて情報を発信しますので防除に当たっての参考にしてください。

平成24年度に新たに発生を認めた病害虫

24年度には新たに18病害と7虫害が報告されました

国内初の病害(4)



トウモロコシ褐色腐敗病
雌穂の包皮に褐色水浸状の病斑が発生します
細菌による病害です



ニンジン黒あざ病
根に0.5~2mm程度の黒い粒が付着し、洗っても落ちません
かびによる病害です



ばれいしょの腰折症状
茎の地際部がくさび形に腐敗して折れる症状です
テンサイ根腐病菌がばれいしょに引き起こす病害です



アロニア灰星病
果実に灰色の星状にかびが発生して腐ります
かびによる病害です



シロタエギク灰色かび病
新葉が黒ずんでかびが密生します
かびによる病害です



テンサイ苗立枯病の原因菌に
ピシウム・ウルティマムが追加されました

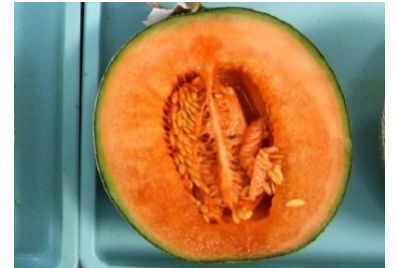
道内初の病害虫(19から4病害虫を抜粋)



トマト・ミニトマトすすかび病
葉に灰褐色で粉状のかびが発生します
外観では葉かび病と区別できません



中央:すすかび病菌の分生子
右:葉かび病菌の分生子



メロン果実内腐敗病
収穫後に果実の内部が腐敗します
腐敗がなくとも食べると非常に苦みを感じます
細菌による病害です



ハクサイ黄化モザイク病
葉にモザイク症状が現れます
ウイルスによる病害です



トマト・ミニトマトのウロコタマバエ(一種)
摘心跡や側枝除去跡が黒褐色に変色し亀裂が入ります
内部には体長2mm程度の幼虫がいます
まだ名前が決まっています

新発生病害虫の詳細な情報は、北海道病害虫防除所のホームページでご確認ください